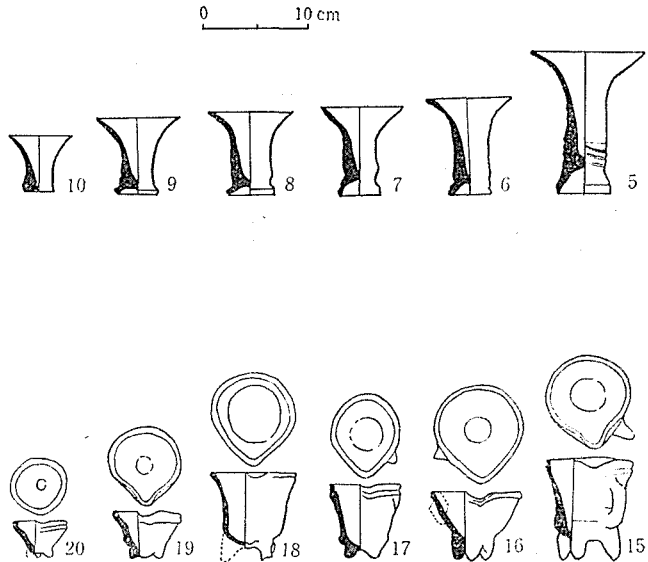


站では、あたらしい陳列ケースに仰韶期からの土器をいれ、春秋は四期、戦国も四期にわけている。北京の考古学研究所でも、この陳列ケースには仰韶期からの土器がならんでいて、春秋は二群、戦国六群、したがって計八期になる。甗のあるをもつて春秋のかぎりとしているが、いづれこの二群も春秋末のものであろう。それから長



銅鏡 1~2. I式, 3~5. II式, 6~8. III式, 9~10. IV式
銅鏡 11. I式, 12~15. II式, 16~17. III式, 18~20. IV式

沙の土器を三分して戦国二期、漢一期としている。戦国二期も、その終末の時期であろう。これらは、もろろん、試論的なもので、公表までには、まだまだ時日のかかることとおもうが、とにかく、どこでも土器の編年には、たいへんよく注意しているもので、殷、周、漢の土器が、その全貌をしめす日も、案外にちかいかいではないかと期待される。

四、古 鏡

樋 口 隆 康

たびたび繰返されているように、解放後の中国考古学は全くめざましいものがある。ただそれは出土地の明らかかな新資料の飛躍的増加という点において、とくに著しいわけで、それらの資料を基にした個々の研究は、ようやく緒についたばかりであるというのが現状である。この点は古鏡の研究についても言えることであつて、新出古鏡の数は千を以て数えうるほどであるにもかかわらず、研究活動の分野においては、あまり著しい業績がなく、むしろ資料の整備に重点をおいているようである。いま中国で出版せられてゐる諸書のうちから、古鏡に関係のあるものをとりあげてみよう。

まず概説的な論文としては、左記のものがあつる。

王士倫「談談我國古代的銅鏡」

(通訊五五の六)

王士倫「試談中國銅鏡紋飾的發展」

(文參五七の八)

沈從文「古代鏡子的藝術特徵」

(文參五七の八)

これらはいずれも、一つの説を論証したというようなものではなくて、古鏡についてのこれまでの知見を概述したものである。すなわち、製作過程、形式分類、文様、銘文と各分野におよんでいるが、これらには別に事新しい知見が加えられているというわけではない。例えば成分分析については、日本の小松・山内両博士の研究をそのまま採用しているなどがそれであろう。ただ図文の解釈については、中国学者の古典に対する深い造詣が所々にみられる。たとえば沈從文氏が戦国鏡のうちで、変様羽状獸文地獸形鏡のなかの鳳形をした長尾獸を爾雅雅獸や広韻にてくる蝻と呼んでいるがごとき、その当否はともかくとして一つの説であろう。

しかしこれらの概説文よりも、われわれには新出資料の紹介がより注目される。いま、一九五〇年以後の各種出版物（文物參考資料、考古學報、考古通訊など）に掲載せられたものだけを例にとつても、戦国鏡約九〇面、前漢鏡約六〇面、後漢三朝鏡約一一〇面、唐宋鏡約二五面ぐらいあつて、その出土地は、遼寧、河北、山東、河南、山西、陝西、甘肅、安徽、江蘇、浙江、江西、湖北、湖南、広東、広西、四川、雲南の各省におよんでいる。この事實は今後の中国研究の上に、きわめて重要な資料を提供するものとおもわれる。ただここで遺憾とされるのは、折角出土地が判明しながら、その出土状態を明記していないものや、鏡の拓本や写真の発表せられていないものが、たびたびあることである。

次に注目されるのは、一地域から多数の古鏡を出土したグループである。第一には湖南省長沙があげられる。ここでは千面を超える

古鏡が当地の文物工作委員会に保管されているのを筆者は実見した。そのなかには戦国鏡あり、前漢鏡あり、後漢、三國、六朝、隋唐から宋元に至る各時代の鏡が網羅されているようであつた。このうちの一部が報告されている。

李正光「略談長沙出土的战國時代銅鏡」(通訊五七の一)

この論文は、長沙出土古鏡のうちでも最も数の多い戦国鏡を整理、研究したものである。一体戦国鏡についての従来の研究は、梅原博士の『漢以前の古鏡の研究』(昭和十一年)を嚆矢とし、ほぼ体系が確立された。一方スウェーデンのカールグレン氏が、また別の角度から新編成されて、「Huai and Han”(B.M.F.E.A. No. 13, 1941)という論文を出された。中国においては、梁上椿氏が『岩窟藏鏡』第一冊(民国二九年一九四〇)において、さきの両氏の説を採つて、再構成された。これらはいずれも鏡式の分類と編年が主なるテーマであつたが、鏡式の分類においては、多少の差違はあつても、一応体系は確立された観が深い。ただ編年については、學術発掘による第一級の資料が少ないことと、紀年鏡をみないことのために、まだまだ多くの問題を残している。

李正光氏のこの論文は、戦国鏡の研究としては、梁上椿氏のそれに次ぐものである。同氏によると、一九五三年より五五年の間に、長沙で八五四基の戦国墓が発掘され、そのうちの二六九基の墓から一六九面の銅鏡がでたという。だいたい五基の墓のうちの一基に、一面の鏡がでてことになる。さらにこの数年來に湖南省文物管理委員会が収集した同式鏡をもふくめて、李氏はこの戦国鏡の整理研究をおこなつたわけである。したがつて、ここに採用した資料は、

先学の三人の著録には見られない新資料ということになる。すなわち、三著をみると、長沙出土鏡としてあげられているのは、カールグレンに細文地花葉文鏡一面、梁上椿に山字文鏡一面があるだけである。

まず形式分類については、いま李氏の分類を梅原博士のものとは比較してみると、

(李正光氏)

(梅原博士)

- 一、素鏡
- 二、純地紋鏡

- 1、雲紋鏡 雷文鏡・渦文地鏡
- 2、羽状紋鏡 変様羽状獸文地鏡

- 三、羽状紋地葉状紋鏡 //

- 四、羽状紋地山字鏡 山字文鏡

- 五、羽状紋地菱紋鏡 花菱文鏡

- 六、雲紋地弧直紋鏡 連弧文鏡

- 七、雲紋地龍鳳紋鏡 蟠螭文鏡

- 八、羽状紋地四獸鏡 細線式獸文鏡

- 九、透彫蟠螭紋鏡 蟠螭透文鏡

このようにみると、名称には差異があるが、原則はほぼ梅原博士の分類法に従っている。すなわちカールグレンのごとく、独自の分類基準をたてたわけではないことが知られる。

一方年代観については、これらの新資料が出土古墳と伴出品を明かにしている点で注目すべきものがある。これについては考古研究所が著した『長沙発掘報告』(一九五七年)を参照する必要がある。

長沙の戦国墓の編年は、副葬の陶器の組合せと、伴出の古銭を基礎にして組立てられているようである。まず陶器のうちで、壺と敦と鼎の三器をセットとする副葬例が最も多く、これらの墓は大体戦国時代の中・晩期のものと考えられる。それよりも早い戦国初期のものとしては、陶甕を副葬する墓があげられてをり、一方時代の下の西漢代のものからは陶盒がでるといつている。これらの古銭から出土する鏡については、まず陶甕を副葬して戦国初期の墓と考えられる52・826号墓から素文鏡がでており、李氏はこれを戦国鏡の早いタイプの代表としている。

これに対し、陶鼎、陶敦、陶壺を有する中晩期の墓からは、その他の各種の形式鏡が数多く出土している。また西漢初期の墓からも蟠螭文鏡の出土した例が一二しられている。この事実を基にして、李氏は戦国鏡の変遷について、次のごとき法則を立てた。すなわち図文の簡単なものから、複雑精美なものへ移行し、鏡胎は薄手のものが古く、厚手のものが時代下る。形は小形のものから大形化して行き、縁のないものが古く、縁のあるものが新しいという変遷が認められるのである。

長沙に次いで主要な古鏡出土地とされるのは浙江省紹興である。この地は戦国時代には越国に属し、名劍の産でしられ、古来錡銅の一つのセンターであつた。ここの鏡については、梅原博士の『紹興古鏡聚英』(昭和十四年)という大著があつて、そのなかに後漢末から呉代の年号をもつ重列神獸鏡、半円方形帯神獸鏡が十面ばかりと、各種の画像鏡五十面余りが載せられている。解放後の報告中に

王士倫「紹興的古代銅鏡」

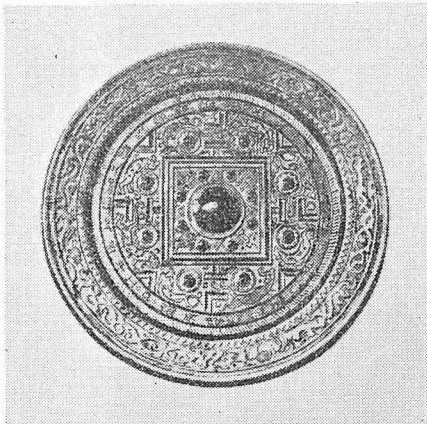
(通訊一九五六年六月)

浙江省文物管理委員會「紹興漓渚的漢墓」(學報一九五七年的一)

王士倫「浙江出土銅鏡選集」

(一九五八年)

がある。このうち『選集』には五五面の古鏡の写真が載つてゐるが、それらはこれまで紹興古鏡の主流をなした画像鏡以外に、連弧文銘帶鏡、四乳四虺文鏡などの前漢鏡、方格規矩四神鏡、獸帶鏡、盤龍鏡、画文帶環狀乳神獸鏡、夔鳳鏡の後漢六朝鏡、そのほか唐、宋、明代の諸鏡まであつて、梅原博士の著録にはみなかつた鏡式の多様化がみられる。個々の鏡についてみると画像鏡のうち、図版一四に拓本をのせた神人車馬鏡が梅原博士著録図版二〇と同一器であるらしいほかは、ほとんどが後者の図録にない新資料である。また紀年鏡として図版第二八にあげた中平四年画文帶環狀乳神獸鏡は、私も



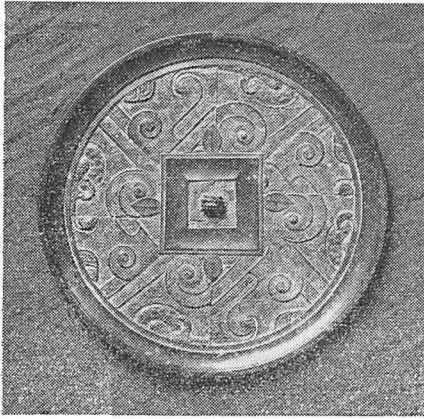
紹興出土 径 15.9 cm (王氏選集より)

上海博物館で実見し、「新中国で着目した漢六朝鏡」(考古学雑誌四三の二)のなかで紹介しておいたが、一般に六朝鏡といわれていた本式鏡の成立を遡らせる重要な資料である。このほ

か明の洪武二十二年の紀年鏡もでている。

次に注目されるのは河南省洛陽である。洛陽は古来から「生は蘇杭に、死は邙山に」といわれた有名な墳墓の地であるが、一九五三年から五五年にわたつて、晉代都城(いまの城東二五里にある漢魏故城にあたる)の西方地区で、五四基の晉代墓が発掘された。この報告は河南省文化局文物工作隊第二隊「洛陽晉墓的発掘」(考古学報一九五七年の1)にあるが、この一群の墓には、太康八年(A.D.二八七)、元康九年(A.D.二九九)、永寧二年(A.D.三〇二)などの墓誌があつて、その营造年代が晉代にあることはまちがいのないものである。これらから、合せて二四面の銅鏡がでた。その鏡式をみると、連弧文銘帶鏡(日光鏡と昭明鏡)、内行花文鏡、方格規矩鏡、夔鳳鏡、位至三公及獸鏡、画文帶環狀乳神獸鏡などの諸型式がある。ただこれらの鏡がどの墓からいかなる遺物と伴出したかについては、全く記述がないのを遺憾とがるが、このうちに前漢鏡、後漢鏡の類をみうけることは注目されよう。こころみに各鏡式の数をしらべてみると、最も多いのは、晉代に近い製作とされる位至三公鏡が八面、六禽文鏡が二面であることを除いては、他は、一面づつである。中国においても伝世鏡の存在を示す有力な資料であるが、彼地においては、日本ほどに伝世ということが特殊視されていないために、殆どこれにふれるものがない。もつとも夔鳳鏡については、西安などにおいても六朝墓から出土しており、中国の学者は、これを南北朝代のものと考へている。

次に蔣績初が紹介している「揚州地区出土的銅鏡」(文參一九五七の8)がある。一九五〇年来、江蘇省文物管理委員会と南京博物



長沙出土 径 10.7 cm (湖北省博物館)

鏡に対する観点がかなり異なることを痛感する。中国における古鏡は、古

院が淮河治水工事に関聯した遺跡調査において、多数の古鏡が出土した。ここでも蟠螭文鏡などの戦国鏡、星雲鏡、草葉文鏡、連弧文銘帯鏡、四乳四虺文鏡などの前漢鏡、方格規矩鏡、画像鏡などの後漢鏡、湖州鏡その他の宋、明鏡にいたる各時代、各種の鏡が出土している。しかし、これには出土古墳についての説明が全くない。

これらは大体一地区から相当数量出土した古鏡の新資料であるが、このほか単独の地域から出土した古鏡のうちにも、注目すべきものはいくつかある。四川省成都市羊子山出土の戦国鏡(考古学報一九五六の4)は、銅器に施されたと同じ怪獣文の一部を鈕を中心にして、四廻旋させた特殊な図形であるが、同一式鏡を湖北省の博物館でもみたときはそれである。

以上、解放後の中国における古鏡についての新資料と、その研究の動きについて通観したが、同じ対象をとりあつかいながら、中国の学者と、日本の学者との古鏡に対する観点がかなり異なることを痛感する。中国における古鏡は、古墳の副葬品全体からみる場合、重要性において劣るところがあり、鏡は工芸的作品としてのみ理解せられている。わが国において、とくに重視されている特殊な社会的意義については、中国ではあまり追求されていない。

それはともかくとして、価値の高い新資料の多数の出現が、今日の中国古鏡の研究の行詰りを打開する強力な刺激になることは、大いに期待されよう。その点でわたくしが最も疑問とされるのは、これらの資料の報告書における取扱い方である。単独の古墳の調査報告の場合は、鏡の出土状態や鏡そのものの写真が載っていることが多く、まだまだである。それでも鏡についての記述はきわめて簡単である。まして一古墳群の一括調査報告の場合、たとえ鏡の写真や図があっても、個々の鏡がどの古墳から、どのような状態で出土したかを明記しているのは、きわめて稀である。このようなとりあつかいは、中国における古鏡が考古学上に占める比重が軽いということに由来するのかもしれない。しかし古鏡研究の新展開には、美術的価値の高い資料よりも、出土状態の明かなものが絶対的に重要なわけであるから、この点の記述は、あくまでも極明に願いたいものである。